

一般社団法人 J A 共済総合研究所
常任監事

あさのひろし
浅野 博 司

「農協改革」の動きと今後の J A ・協同組合の役割に関して、識者の見解等を紹介しつつ、私見を述べてみたいと思います。

「規制改革」の嵐

人々の暮らしをより良いものにするためには、環境の変化に応じて、法律やさまざまな制度・ルールを、適切に変えていかなければなりません。その際、変更の重要性や影響の度合いが、高いものであればあるほど、本質を見すえた議論をしていくことが必要です。より良い秩序をつくっていくためにはどうしたらいいのか、社会にとってどのようなルールが良いルールなのか、衆知を集めて合意を形成していく過程は、民主主義に欠かせないものです。変更の真の目的が国民の前に明らかにされず、特定の勢力の利益を図るものであったり、現状認識が間違っていたり、冷静な効果予測がなされていなかったり、そもそも、当事者や専門家が加わる実質的な議論の場がほとんどなかったり、などということでは困ります。いや、困るところか、そんなことでは、人々の幸福や生存に害を及ぼすことになりかねません。

このたびの農協改革の政府主導のありようは、こうした点で、いくつか疑問があったよ

うに思います。

近年、「構造改革」、「規制改革（緩和）」を錦の御旗に、あたかも「改革」そのものが目的であり、無秩序の導入にこそ意味があるかのごとく、既存制度の変更・解体を性急に行なおうとする傾向があります。

このような事態について、識者の意見を紹介します。

平成の日本は、延々と「構造改革」「規制緩和」を叫び、制度の抜本的改造こそがすべてを解決するという根拠なきスローガンに踊らされ続けてきました。政治・行政システムの大掛かりな改造を繰り返しながら「まだ改革が足りない」と言い続け、日本社会の秩序をギリギリのところまで保全してきた被膜を、乱暴に破壊していきました。

民主制は、（中略）マナーやルールに基づいて異なる意見を調整しながら、少しずつ合意を形成していくのですから、時間も手間もかかります。しかし、多くの国民がこのようなシステムに耐えられなくなってきています。かつて「拙速」と言われたことが「スピード感」として賞揚され、時間をかけずにトップダウンで決定することが「リーダーの条件」と言われたりします。

しかも、その決断の正当性は「民意の支持」に置かれており、気分化した世論と独断的政治家が一体となる「多数者の専制」が具現化されようとしています。

(中島岳志『「リベラル保守」宣言』)

この20年ほどの「構造改革・規制緩和」の流れというのは、国民国家が「弱者」のために担保してきた諸制度（医療・教育・行政・司法）を「無駄づかい」で非効率的だと誹るものでした。できるだけ民営化して、それで金が儲かるシステムに設計し直せという要求がなされました。その要求に応えられない制度は「市場のニーズ」がないのであるから、淘汰されるべきだ、と。

(内田樹ほか『脱グローバル論 日本の未来のつくり方』の内田氏によるまえがき)

外部からの農協改革の圧力は、こうした流れや見方と、無縁ではないでしょう。

これからのJAの役割

2012年の国際協同組合年に際して、政府広報（2012年6月28日内閣府大臣官房政府広報室「協同組合がよりよい社会を築きます～2012年は国連の定めた国際協同組合年」）が出されました。そこには、次のような記述があります。

協同組合は、地域社会に根ざし、人びとによる助け合いを促進することによって生

活を安定させ、地域社会を活性化する役割を果たしています。人と人が支え合い、支え合うことによって生きがいを感じられる社会を形成していくことは重要な視点であり、協同組合はその主要な担い手のひとつです。

政府は、国民生活に重要な役割を果たしている協同組合の地域に根差した助け合い活動がさらに広がっていくよう（中略）協同組合の発展をできる限り後押ししていきます。

協同組合の重要な役割の一端が、正しく認識されています。現政府も、この基本的な考え方自体を、否定しているわけではないものと思われま

しかし、協同組合のこうした役割が、依然として、社会全体に十分に伝わってはいない印象を受けます。

市場原理主義やグローバリズムの潮流が、激しくなっている今だからこそ、発揮すべき協同組合の役割があります。すなわち、社会制度の適否の判断まで、市場に委ねるべきだというような市場原理主義や、「国民国家のもろもろの『障壁』（国境線、通貨、言語、食文化、生活習慣などなど）が融解し、商品、資本、人間、情報があらゆる『ボーダー』を乗り越えて、超高速で自由自在に行き来する」（内田樹、同上）というグローバリズムに対して、協同組合は、地域に根付いた人々の等身大の生活を防御しようとするもので

す。これらのことが、まだ、多数の国民に、気づかれていないのではないのでしょうか。

協同組合は、資本主義を否定し、その廃絶をめざすものでは、もちろん、ありません。資本主義の持つ破壊力、自らではコントロールすることのできない巨大な力と速度から、地域の生産や経済活動を守るものです。そして、そのことが、経済システム全体の危機を回避し、バランスと持続性を与えることにも、つながると考えられます。

先日、ICA（国際協同組合同盟）連携セミナー「協同組合の役割と規制改革の影響」（2015年2月12日、JC総研主催）が開催されました。その際、ICAのジャン＝ルイ・バンセル理事の講演「ICA連携・調査団報告と日本の協同組合の役割」において、同氏は、今日の協同組合の役割に関連して考察されるべき点として、

- ・協同組合は経済の多様性の一つであり、したがって、経済の回復力の強さに貢献すること
- ・協同組合は、時には公的部門よりも効率的に、人々の経済的・社会的な幸福を高めることができること
- ・近代化や技術革新は、協同組合と矛盾するものではないこと

を提示しました。勝手な解釈かもしれませんが、これは、協同組合が上述のとおり、「経済システム全体のバランスと持続性」に寄与することを含意するものと言えるでしょう。

『月刊JA』の2015年1月号（特集 これか

らの「農業協同組合」を考える）には、中沢新一氏による「『豊かな暮らしやすい地域づくり』のために－JA・協同組合の現代的意義」と題する提言が載っています。今後のJAの役割に関して述べられているところを、一部紹介します。

これからの日本の経済と文化がよみがえっていき、あるいは生き延びていくためには、ローカルで生きる知性が、エネルギーや自然環境や経済システムまで、自立性を持って自分たちの世界を作っていく努力をしなければならない。そのとき大切なことは、グローバルなものとローカルなものをつなぐ媒介の働きをする強力な機構を、さまざまな場所に作りあげていくことである。

JAとは、ローカル経済とグローバル経済を媒介しつつなく組織である。（中略）JAは農業者と都市経済の間に防波堤機能を差し込むことによって、都市中心に動いているグローバル経済の動きが直接ローカルには及んでこないようにコントロールできる位置にいる。グローバルな力に対して何段階ものクッションをつけて、ローカルの要求に合うような形に変形したうえで受け入れていくようにする、そういう機構がJAなのだと思う。

市場経済は競争だけになってしまった。勝ち組は、周りを蹴落とし、グローバル経

済の世界に飛び込んでいく。(中略) ローカル経済は「競争とバランス」を保つことを意識的にやっていかなければならない。(中略) それができる立場にあるのが、JAなのではないだろうか。

資本主義の発達等により、共同性が喪失し、個人のアトム化が進んだと言われます。いろいろな場で、いかにして地域コミュニティを再生させ、地域経済構造を再構成するか論じられ、取り組まれています。一方では、閉鎖的・固定的な共同体からの解放が、まだ十分ではないという主張が、なされたりもします。

私たちが向かうべきは、もちろん、グローバルズムとの融合でも、外界を遮断する壁の中にこもることでもありません。自然の秩序と循環に合わせ、また、グローバル経済の動きや技術革新の成果を適切に取り入れながら、生産、経済活動を行う、自立性を持った地域社会を作っていくことです。これが、JAグループ自己改革でめざす「持続可能な農業」と「豊かで暮らしやすい地域社会」の実現につながります。

JA、および私たちJAグループで働く者は、「グローバルなもの」とローカルなものをつなぐ媒介」の働きができるように、専門性の発揮と地域という現場へのかかわりを強めていくことが、求められます。専門的で新しい知識・技術を得て、グローバル経済との不適切な短絡を避けながら、ローカル経済の固有性と結びつける。私たち自身も属するロー

カルの力を守り、自立性を高めていく。ローカルは、しなやかに生き延びていく。そこに深く関与し続けることに、私たちの大きな役割が、あるのだと思うのです。

ローカルには、多様性・個別性があります。JAがめざす自己改革の具体的なあり方は、状況によってさまざまです。個別の各JAが、地域に貢献するために、どのような役割で何を果たしていくのか、組合員とともに、ストーリーを考え、示し、実行していくことにより、自らの進化を周りに気づいてもらうことも重要です。このことが、そのJAに対する地域の人々の支持、ひいては、これからの協同組合の意義と必要性について、社会全体の理解を、広げることにもなるのではないのでしょうか。